

過去・未来時表現と話者の「視点」

向 井 剛*

(昭和56年10月31日受理)

The Speaker's Point of Concern and the Expressions of Past and Future Time

Tsuyoshi MUKAI

(Received Oct. 31, 1981)

0. はじめに

同じ事象を表わすのに複数の言語表現が存在する。例えば、辺りが騒がしいのを知って、

(1) a. What happened?

b. What's happened?

と言え、又、「ジュンコが、明日、京都へ発つ」という出来事に対して、

(2) a. Junko will leave for Kyoto tomorrow.

b. Junko is leaving for Kyoto tomorrow.

などの表現が可能である。(1)a・bは過去の、(2)a・bは未来の出来事に共に言及し、a・bの間には、知的意味の違いはない。しかし、このことは両表現が *interchangeable* であることを意味するのではない。例えば、(1)a・bについて考えるなら、取り乱した姉とそれをいぶかる妹の対話

(3) A: Stop this hysterical outburst and tell me what's happened? . . .

. . .

B: The loss—the loss . . .

A: Belle Reve? Lost, is it? No!

B: Yes, Stella.

A: But how did it go? What happened?

(A *Streetcar Named Desire*)

に於て、下線を施した現在完了形と過去形の文を入れ替えることは出来ない。

過去時に言及する現在完了形のこれまでの指導は、「完了」「結果」「経験」「継続」といった意味分類の説明に終始し、同じ過去時の事柄に言及するもう1つの形態—過去形—との対比という本義にかかわる重要な点を、不十分なうちに済まして来たのではなからうか。又、未来表現についても、Will/Shall+Inf., Be going to+Inf., Present Progressive, Will/

*長崎大学教育学部英語科教室

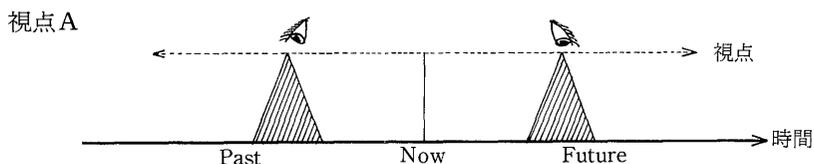
Shall+Progressive Inf., Simple Present 等の形態が未来に言及しうることを考えれば、単純現在形の、或は、現在進行形の特殊な用法であるといった断片的な説明だけで済ましておく訳にはいかないであろう。

この小稿は、こうした複数の言語表現間の選択が話し手の「視点」という観点からなされていること、そして、現在時を境に鏡像関係になっているこの視点の取り方を学習者に指導することが時制表現のより本質的な理解につながる、と説くものである。

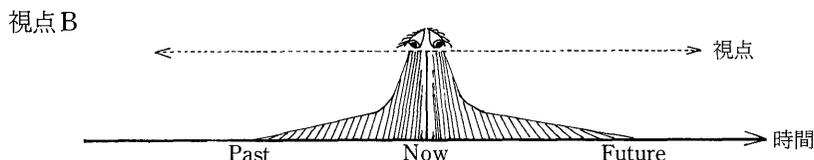
1. 視点の取り方

我々は回りで起こる出来事を時間の側面から、まず、Now/Not now の識別で捉え、更に、Not now を Before now/After now に区別する。この識別は時制として言語化される。又、その出来事の始まり・中・終りの一部を焦点化するか、或は、時間的拡がりを捨象し、1つの全体としてその出来事を捉えるか、という認識のあり方に対しては相という形で言語的に明示する。ここで問題なのは、時制や相の決定は言語使用者外の要因だけによるのではなく、最終的には、使用者の内的要因によりなされることである。このことは、時間的には「ラジオがこわれる」という出来事が起こったのは Before now にもかかわらず、現在時制を選んで Someone has broken the radio. と見え、It rained all night. の単純形の代りに It was raining all night. と言っても知的意味に変化がないこと、などから納得できる。ここに言う内的要因は話し手の取る視点である。では、過去時・未来時の中でどのような視点の取り方があるのかを検討してみよう。

まず、過去時・未来時を現在（発話時）とは断絶したもの、関連のないものとして捉える視点がある。なるほど、過去の事柄や現在の事態が、各々、現在時、未来時に影響しないことはありえない。しかし、この視点を取れば直接的な関係がないとするのである。史実を記する chronicler が持つ視点である。これを図示すれば次のようになる。



いま1つは、過去時・未来時を強く現在との関連に於て捉える視点である。現在時をまず意識して、その関連に於て過去時・未来時を考えるのである。図示すれば次のようになる。



以下、上図の視点A・Bに対応する未来時・過去時表現を検討していくことにする。

2. 視点 A

2.1 未来時表現

未来に言及する代表的な5表現のうち、視点Aを取るの Will/Shall+Inf. と Will/Shall+Progressive Inf. である。その根拠として次の例を考えるとよい。

- (1) He'll know about Laura when he gets here. (The *Glass Menagerie*)
 (2) If you accepts the job, you'll never regret it. (Leech)
 (3) By the time I get my jalopy down there, her train'll be there. (G. M.)
 (4) He'll be angry to find that nothing has been done. (Thomson and Martinet)

(1)~(4)の文に be going to, 現在進行形, 或は, 単純現在形を用いれば, 容認不可能な文となる。それは, 主節で表わされている行為の実現如何が(1)~(4)各々の下線部にかかっているからであり, これが何よりも未来時に生じる事柄だからである。しかし, この下線部の内容が現在時に起こっていることをも含んでいる場合, 当然, 視点Bを取ることができ, 未来表示は Will/Shall 系以外でも可能となる。

- (5) He's going to get his licence taken away if he keeps that up.
 (Death of a *Salesman*)

(that は, 目がくらみ信号を見誤ったり, 路肩に乗り上げたりする危険な運転をさし, 既に幾度か経験している。)

Will/Shall+Inf. と Will/Shall+Progressive Inf. とは, 前者の方は純粹に未来に言及する用法に加え, 法的意味からくる意志未来の用法も併せ持つ点で, 異なる。従って, 次の例に於て, (6)a が依頼文と考えられかねないので, Will/Shall+Progressive Inf. を用いた(6)bの方が予定としての演奏の有無を尋ねる控えめな表現として好まれるのである。

- (6) a. Will you make another performance?
 b. Will you be making another performance?

2.2 過去時表現

視点Aを取る過去時表現は過去形である。詳述は3.2で行うので, ここでは, 視点Aであることを利用した次のていねいな表現を示すに止めておく。

- (7) A: Is Mr. Jones in?
 B: I'm sorry; I'm afraid he's out.
 A: I was expecting to see him. (Keene and Matsunami)

実際は, 今も会いたいのだけれども, 視点Aを取ることににより, 現在とは無関係の単なる過去の気持であったということを明示的に示している。

3. 視 点 B

3.1 未来時表現

強く現在時との関連に於て未来時に言及する表現に Simple Present, Present Progressive, Be going to+Inf. がある。

- (1) We graduate and we go separate ways. You'll go to law school . . .
 (Love Story)
 (2) a. Relax. You're getting short-winded again. (D. S.)
 b. A: Naturally. I would like to know when he's coming.
 B: He's coming tomorrow. (G. M.)
 (3) My sister is going to have a baby! (S. D.)

共通しているのは、現時点で未来に起こる出来事の兆候が、明示的にも比喩的にも、もう既に現われ、それ故に、未来に於てその行為が実現するであろうという認識の展開である。(1)の単純現在形は暦の如く確定的と判断した場合。現在進行形は、(2)aのように、行為の初期段階であるのど鳴りが既に始まり、実際に、行為実現につながる動きが始動している場合。又、(2)bのように、実質「来る」という運動が始まっていなくとも彼の気持がもう既に「来る」ことに傾いており、この意味に於て、「行為ガモウ既ニ始マツテイル」と見做した場合。be going to は現在進行形と同じ認識の過程を踏むが、異なる点は、前者には純粹未来の用法に加え「～するつもりである」という意志の意味が存在することである。特に、主語が human、動詞が agentive の場合、この2つの用法を明確に区別することが出来ない。

このあいまいさを避けるために、現在進行形が使われ、主語の意志が関与しない未来の出来事ということをはっきり表わすことが出来る。例えば、

- (4) I'm sorry, I'd like to have a game of billiards with you, but I'm taking Mary out for dinner. (Leech)

に於て、言い訳の文として be going to を用いれば、玉突きよりもメアリーを夕食に連れて行く方がむしろ自分の望みである、と誤解されかねないが、現在進行形は自分の意志とは関係しない予定としての行動を表わし、適格な釈明文となる。

ついでながら、意志未来としての will と be going to とは、次の点で異なる。be going to は発生的には Present Progressive であり視点Bを取って、実際的にも比喩的にも、「モウ既ニ行為ガ始マツテイル」と見做す訳で、発話時以前に決めた意志を表わす。一方、will は発話時に思い立った意志と言える。従って、次の文に be going to を使えば不自然になる。

- (5) A: Waiter! I saw you drop this knife on the floor. It's dirty.

B: I'm sorry, sir. I'll bring you another one.

- (6) A: I've just missed the BEA flight to Paris. Can you book me a seat on the next plane?

B: I'll see if there's a seat on BE 22 . . . (Read all about it!)

3.2 過去時表現

視点Bを取った時の過去時表現は現在完了形である。現在完了形は4つの意味機能に分けて考えるのが一般的であるが、次の例にみるように、have+~en 自身が果してこの意味機能を持つのだろうか。

- (7) The birds have loved their nest.

- (8) a. The birds have deserted their nest.

b. The birds have deserted their nest before.

c. The birds have deserted their nest a long time.

(7)と(8)aは動詞が異なる (loveはstate verb, desertはevent verb) だけで、(7)は継続、(8)aは完了・経験と考える。しかし、(8)aにbeforeを添えた(8)bは経験となり、a long timeを添えた(8)cは(8)aには無かった継続の機能を持つという。このことは、4つの機能分化は動詞、より決定的には、副詞と文脈に依るもので、have+~enにとっては二義的なものであることを表わしている。これは、現在完了形の起源からも首肯できる。

- (9) a. I have made a new coat.

b. I have a new coat made.

今でこそ、a・bの間には意味の分化がみられるが、Curme (1931)も言うように、現在完了形はもとを正せばbの構文から生まれたのであり、「私は新しいコートを作った状態に今ある」これが原義なのである。そして、この「(過去時に)～した状態に(現在時)今ある」という have+～en の本来の意味の周辺に、動詞・副詞・文脈に依存するいわゆる4つの意味分化が存在するのである。

Hornby (1975²) は次のような例を挙げて、現在完了形の働きを示している。

- (10) I've come to school without my glasses (so now I can't see to read).
 (11) She has spent many years in France (so now she probably knows a lot about France and the French).
 (12) Bill has been out of work for several months (so now he and his family are short of money).
 (13) Mr. White has gone to Burma (so now his place is empty).

現在完了形Xは()内の文Yを暗示するというが、聞き手・読み手にとってみれば、(10)～(13)を過去形に替えたXからでもYが推測できる。ここで問題なのは、受け手側ではなく言語使用者が現在時に関心を置いて過去時を眺めるのか、現在時とは関係なしに客観的に過去の出来事を眺めているのか、ということである。つまり、言語使用者の発話に到るまでの過程は、現在完了形ではY→Xであるのに対し、過去形ではX'だけということである。従って、0で問題にした What's happened?→What happened?の移行は、上の説明に見るように、現在の姉の不安定な精神状態をいぶかるからこそ、先に、現在完了形を選び、次に、出来事そのものを尋ねる過去形を選択した、と言える。

4. おわりに

未来時表現のうち、中学校で扱われるのは Will/Shall+Inf. と Be going to+Inf. と Simple Present で、残りは高等学校送りである。現行の中学教科書(昭和56年度改訂)は導入順序に違いはあるものの、意志未来と単純未来の用法を区別し、そして、各々の用法の中では will と be going to との間に違いを認めない、という点では共通している。導入の課では典型的な例が反復されるのが普通で、用法の区別は説得力を持つが、課を追う毎に、どちらも断じ難い例がふえてくる。導入当初は今までの提示の仕方でもよいとしても、3年時、或は、他の未来時表現が導入される高校になれば、用法の区別はその主語、動詞、文脈に依存するもので、より大事なこと、より本質的なこととして、話し手の取る視点の違いからバラエティーに富む未来時表現の使い分けがなされている、ということを教えてやるべきである。

過去時表現については、視点の取り方の導入がより重要となる。日本語には、現在完了形に対応する固有の形態がないからである。中学生や高校生が、どの程度、過去時表現の使い分けを理解しているのかを見るために、次のようなテストを行った。対象は、中・高一貫教育を取るT校の中3(156名)と高2(181名)である。

問 次の日本語を英語に直す場合、下線を施した部分に、過去形(a)、現在完了形(b)のうち、どちらを使えばよいと思いますか。記号で答えなさい。

- (1) 昨日、僕の車もこわれてしまった。 ()
 (2) なぜ、うそをついたのか。彼は困っていたよ。 ()

- (3) その国は、一度も戦争に負けたことがありません。()
- (4) 彼は、まだ、起きて来ません。()
- (5) 彼は、2年前から英語を教えています。()
- (6) やっと、プールへ泳ぎに行ける。宿題を仕上げたから。()
- (7) 君のケーキも食べたよ。全然、残っていないんだ。()
- (8) 娘が窓を割ったのです。冷たい風が入るでしょう。()
- (9) 辞書をなくしました。新しいのを買ってくださいませんか。()

テストの結果は、次の表のようになった。数字は百分率表示である。

		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)
a	中 3	95	85	6	6	4	16	51	69	68
	高 2	92	86	5	9	1	15	23	54	63
b	中 3	5	15	94	94	96	84	49	31	32
	高 2	8	14	95	91	99	85	77	46	37

正答率が高いのは、問(1)(3)(4)(5)である。問(1)には、明らかに過去を表わす副詞「昨日」があり、問(3)(4)(5)には、各々、経験・完了・継続の用法を表わす訳語がついているからであろう。問(6)は、視点Bによる発話であることがはっきりしているにもかかわらず、正答率は中・高生とも少し低くなっている。問(7)(8)(9)では、現在完了形と過去形の選択が大きく分かれている。どちらでも表わしうるが、ここでは、発話者の視点はAよりもBの方が自然で、現在完了形を用いるのが適当であろう。助動詞「た」を、はっきりした根拠もなく、漠然と現在完了形と過去形とに分けているのが実情のようである。問(2)は問(7)(8)(9)と同じ文章構成であるが、第二文「彼が困っていた」のは過去のことであるから、現在完了形を使うことは出来ない。ここでも、中・高生とも正答率が低くなっている。このように、中・高生の理解の程は訳語による理解の域であり、現在完了形と過去形との違いを踏まえた本質的なものになり得ていない。現在完了形については、4つの意味機能を教えただけで、指導を終えたとせず、同じ過去時に言及する過去形との違いを是非とも指導すべきである。

視点の取り方は言語使用者側に立つ問題である。しかし、この観点から過去・未来時表現を体系化して導入することは、聞き手・読み手の理解を深めることにもなろうし、何よりも、これまでの時制表現指導の不十分な点を補うことになると思うのである。

参 考 文 献

- Close, R. A. (1977²) *English as a Foreign Language* London: George Allen & Unwin
- Curme, G. O. (1931) *Syntax* Boston, Mass.: Heath
- 五島忠久・織田稔 (1977) 「英語科教育 基礎と臨床」東京：研究社
- Hornby, A. S. (1975²) *A Guide to Patterns and Usage in English* London: Oxford Univ. Press
- Keene, D. and Matsunami, T. (1969) *Problems in English* Tokyo: Kenkyusha
- Leech, G. N. (1971) *Meaning and the English Verb* London: Longman
- Thomson, A. J. and Martinet, A. V. (1969²) *A Practical English Grammar* London: Oxford Univ. Press